

パラグアイの 日系人

平成16年度北海道海外技術研修員
早川修ファウスト
(パラグアイ共和国)



パラグアイとは？

パラグアイは、南アメリカの中央に位置し、“南米の心臓”と呼ばれている国です。周りをブラジル、アルゼンチン、ボリビアに囲まれ、高い山も海もない、のっぺらとした所です。亜熱帯の気候で、年間の平均気温は22℃と穏やかに見えますが、夏には40℃まで上がり、冬場には氷点下まで下がる場合があります。また春と秋は、一日に四季があるといわれるくらい気温が変化します。

僕が生まれたエンカルナシオン市は、パラグアイの南部イタプア県に位置するパラグアイ第3の都市で、“南の真珠”とも呼ばれています。巴拉河をはさんで向岸にはアルゼンチンのポサダス市に面しており、現在は国際橋で結ばれ、アルゼンチンとの交通の要となっています。近くには日本、ドイツ、イタリア、ロシア、ポーランド等による移住地があり、その中心として各種農作物の集積地の役割も果たしています。

パラグアイ人の95%以上がメスティーソと呼ばれるスペイン人とグラナーニ族との混血で、残りはアジアやヨーロッパからの移住者が占めています。南米で唯一、スペイン語のほかにグラナーニ語を公用語としていて、特に農村部ではグラナーニ語しか話せないという高齢者の方もいます。

グラナーニ族の文化とスペインの文化がうまく融合していて、その代表といえるのが6月中旬に行われる“サン・ファン祭”です。カトリック教の聖人の名前が付いていますが、この日に食べられる料理や伝統的な遊びなどには、グラナーニ文化の影響が受けられます(かなり過激な物も)。エンカルナシオン市では毎年2月になるとカーニバルが開催され、パラグアイ国内やアルゼンチンのポサダス市などから観客が訪れてきます。

パラグアイに名所といえる所はあまりないのですが、まず思い浮かぶのがイグアスの滝です。世界三大瀑布に数えられ、300以上の大小の滝が轟音を立てながら流れ落ちてゆく様はまさに圧巻です。この他には世界最大級の発電量を誇るイタイプダムや、映画“ミッション”に登場したイエズス会の伝道村跡などがあり、UNESCOの世界遺産にも登録されています。

この国最大の特徴は一般的にのんびりしていることで、ラテン

圏でも一番のどかなところです。そのため近隣諸国からは“ド田舎者”と呼ばれることもある…。こんなしようがない“田舎者の国”が、僕の愛する生まれ故郷です。

パラグアイの日系人

「日系」の定義は、“日本から海外に移り住み、定住した社会で、独自の社会と生活スタイルを作り上げた、日本人を祖先に持つ人々。この中には、日本に帰国したものの、日本人とは、異なるアイデンティティを持つ人々も含まれる。(国際日系研究プロジェクト)”、だそうです。

日本人が最初にこの地を訪れたのは、1912年頃だといわれています。パラグアイ共和国への日本人集団移住は、ブラジルへの移住が制限されたことがきっかけとなりました。本格的な移住は1936年、ブラジルから10家族、日本から11家族が入植し、ラ・コルメナ(La Colmena)移住地を作ったことに始まります。そこには第二次大戦により移住が中断されるまでの間、123家族790名が入植しました。戦後1955年～1961年にかけて、南部を中心に日本海外移住振興株式会社(JICAの前身)がチャベス(Federico Chavez)移住地、ラ・パズ(La Paz)移住地、アマンバヤ(Amambay)移住地、ピラポ(Pirapo)移住地、イグアス(Yguasu)移住地を開設。

現在、パラグアイに居住する日系人は約7000人で、北海道、岩手県、高知県などの出身者が多いのが特徴です。多くは農業に従事していますが、首都のアスンシオン市やエステ市、エンカルナシオン市といった都市部では商業、工業、金融業を営む家屋も増えています。また、日系人の医師や、弁護士、軍や警察の高官なども、それぞれの分野で



ガウチョ(カウボーイ)料理のアサード。肉を炭火でじっくり焼いたもの。パーティーやイベントなどの定番料理